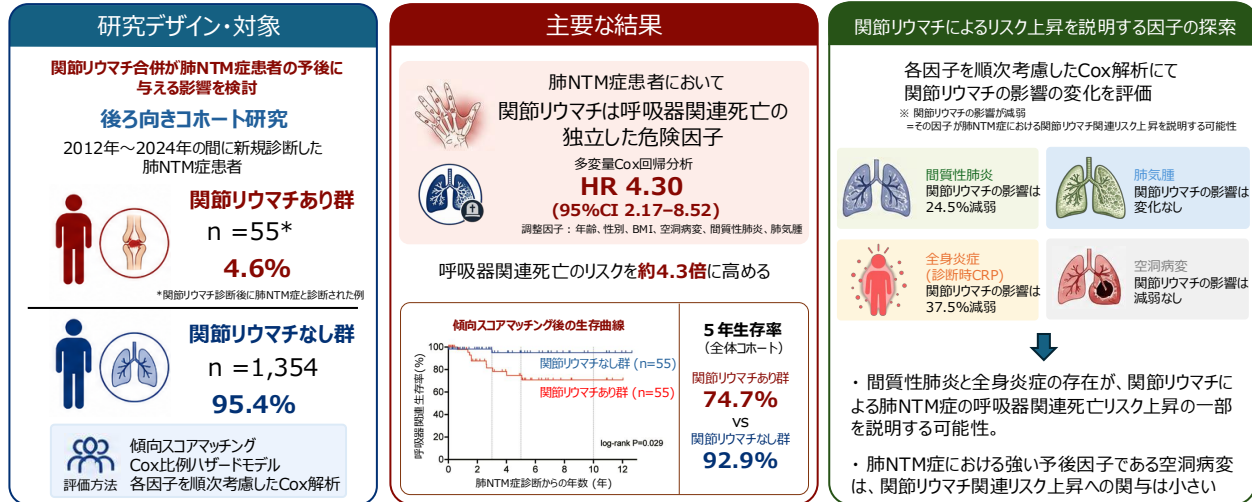


関節リウマチに発症した肺 NTM 症は予後不良

— 間質性肺炎と全身炎症が悪影響 —

2026年5月4日 RMD Open 誌でオンライン公開



臨床的意義

- ・ 関節リウマチは肺NTM症の“発症リスク”だけでなく、診断後の“予後悪化”にも関連すること
- ・ 関節リウマチを合併した肺NTM症患者では感染制御だけでなく、間質性肺炎および全身炎症を含めた包括的管理が重要

HR:ハザード比、BMI: Body mass index、CI:信頼区間、CRP: C反応性蛋白

【研究の概要】

2012年から2024年に大阪刀根山医療センターで初めて肺非結核性抗酸菌症(肺NTM症)と診断された患者さん1,420例を対象とした研究を実施しました。本研究では、肺NTM症と診断された時、既に関節リウマチに罹患されていた患者さんでは生存率が低く、中でも間質性肺炎を合併されている関節リウマチ患者さんや全身炎症(CRP値)が高い関節リウマチ患者さんでは特に死亡リスクが高いことが示されました。

【研究の背景】

肺NTM症は慢性的に進行する呼吸器疾患であり、基礎疾患の影響が予後に大きく関与します。これまで、高齢、男性、やせ、空洞病変などが予後不良因子として報告されてきました。一方で、関節リウマチは治療に免疫抑制剤を使用することや、間質性肺炎や気管支拡張症などの肺病変を合併することより、肺NTM症発症のリスクになることが知られていましたが、肺NTM症の生命予後への影響については明らかではありませんでした。

【臨床的意義】

治療で免疫抑制剤を必要とする関節リウマチ患者さんは肺NTM症の発症に気を付けなければなりません。さらに万一、関節リウマチ患者さんが肺NTM症を発症してしまった場合、抗生剤によりNTM菌を制御するのみならず、今後、間質性肺炎や全身炎症を考慮した包括的な管理が必要であることがわかりました。

詳細はRMD Open掲載論文をご参照ください。

<https://rmdopen.bmj.com/content/12/2/e006854>